

特別講演 2

ガゴメ昆布フコイダンの免疫賦活作用に関する最新知見

鈴木 信孝

金沢大学大学院医薬保健学総合研究科

臨床研究開発補完代替医療学講座

●ガゴメ昆布フコイダンの免疫賦活作用

フコイタンは昆布やモズクなどの褐藻類に含まれる多糖類であり、フコースを主要な構成糖とし、その一部が硫酸化されていることが大きな特徴である。北海道函館近海に生育するガゴメ昆布は松前漬けやとろろ昆布として長く食用とされており、昆布の中でもフコイタンを豊富に含む。フコイタンは由来となる海藻によって構造が異なることが知られており、ガゴメ昆布フコイタンには、F、U、G-フコイダンの3種類が含まれている。また、ガゴメ昆布フコイタンはフコースの硫酸化度合いが高いことも大きな特徴である。

これまでの基礎研究において、ガゴメ昆布フコイタンには抗腫瘍作用、免疫賦活作用、抗がん剤の副作用軽減作用、血栓形成抑制作用、抗アレルギー作用、育毛作用など実に多様な機能性があることが明らかになっている。ガゴメ昆布フコイタンを担癌マウスに経口投与すると、脾臓細胞中のNK活性の上昇と腫瘍増殖の抑制が認められる。ガゴメ昆布フコイダンの抗腫瘍効果にはNK細胞やIFN- γ が重要であることが中和抗体を用いた実験により示されている。ガゴメ昆布フコイタンを経口投与したマウスの腸管パイエル板においてはIFN- γ 産生能が向上していることから、フコイタンは腸管粘膜の免疫細胞を活性化している可能性が高い。さらに、ガゴメ昆布フコイタンはマクロファージなどのTLR-4を介して、サイトカイン産生を促進していることもわかっている。こうした免疫賦活作用には、高分子状態であることが重要であり、ガゴメ昆布フコイダンの低分子化は免疫賦活効果、抗腫瘍効果を著しく減弱させた。

OVA感作アレルギーモデル動物においては、ガゴメ昆布フコイダンの経口投与は、Th1/Th2バランスを改善し血中IgE量を低下させることも明らかになっている。また、インフルエンザ感染モデル動物においては、ガゴメ昆布フコイタンは呼吸器中のインフルエンザウイルスの増殖を強く抑制し、感染後の気道粘膜上IgA抗体の分泌を促進した。さらに、最新の知見では、抗がん剤モデル動物において、ガゴメ昆布フコイタンが白血球減少を抑制するという知見も得られている。

このように、ガゴメ昆布フコイダンの免疫機能に対する有効性や作用メカニズムがin vitro試験や動物試験によって詳細にわかってきており、様々な疾患の予防への応用が期待されている。

●ガゴメ昆布フコイダンの安全性に関する情報

ガゴメ昆布はわが国において長い食経験を有する食品素材であり、その安全性は極めて高い。加えて、食品素材として用いられているフコイタンは海藻に由来する過剰な塩分やヨードが除去されている。ガゴメ昆布由来のフコイタンは、遺伝毒性試験（変異原性、染色体異常、小核）やラットへの単回投与試験、薬物代謝酵素試験などにおいて問題がないことが明らかになっている。また、健常成人を対象とした4週間の過剰摂取試験（ガゴメ昆布フコイタンとして600-900mg/日）においても安全性が確認されている。

●ガゴメ昆布フコイダンのヒトでのエビデンス

基礎研究に続き、ヒト試験においてもガゴメ昆布フコイダンの有用性が研究されている。高年齢者を対象とした8週間の摂取試験において、ガゴメ昆布フコイダン（50mg/日）と乳酸菌を配合した食品の摂取により血中IgEの低下が見られた。また、比較的NK活性が低い層においてNK活性の増強傾向を示した。また、高年齢者にガゴメ昆布フコイダン（200mg/日）を4週間摂取させたプラセボ対照二重盲検試験においては、末梢リンパ球のTh1サイトカイン産生能とTh1/Th2バランスの増強が認められた。さらに、がん治療を終えた者や、がん治療中で代謝拮抗薬やホルモン剤の服用者を対象にした8週間摂取試験において、NK活性の上昇例を認めた。また、種々の検査で安全性が確認された。

このように、豊富な基礎研究データに加え、最近では高年齢者やがん治療者などの免疫低下リスク者に対するエビデンスも得られてきており、安全性の高い免疫賦活成分としてガゴメ昆布フコイダンが利用される機会もさらに増えるであろう。

参考文献

- ・大野木宏ら，日本補完代替医療学会誌 第8巻 第2号 45-53 (2011)
- ・鈴木信孝ら，日本補完代替医療学会誌 第9巻 第1号 149-155 (2012)
- ・鈴木信孝ら，日本補完代替医療学会誌 第10巻 第1号 17-24 (2013)
- ・Ohnogi H. *et al.*, *JJCAM* (in press)

プロフィール

鈴木 信孝（すずき のぶたか） 医学博士

昭和56年防衛医科大学卒業後、金沢大学産科婦人科医局に入局。恵寿総合病院産院院長等を経て、平成5年金沢大学医学部助手、平成6年金沢大学医学系研究科講師となり、平成16年から補完代替医療学講座教授、平成19年から臨床研究開発補完代替医療学講座特任教授となる。平成11年からハルビン医科大学客員教授を併任、平成13年から日本補完代替医療学会理事長となる。補完代替医療分野のなかでも特に、各種機能性食品群の臨床研究が専門。

共催：タカラバイオ株式会社